

全電源喪失の記憶

証言 福島第1原発

13

「何もない、電源も」

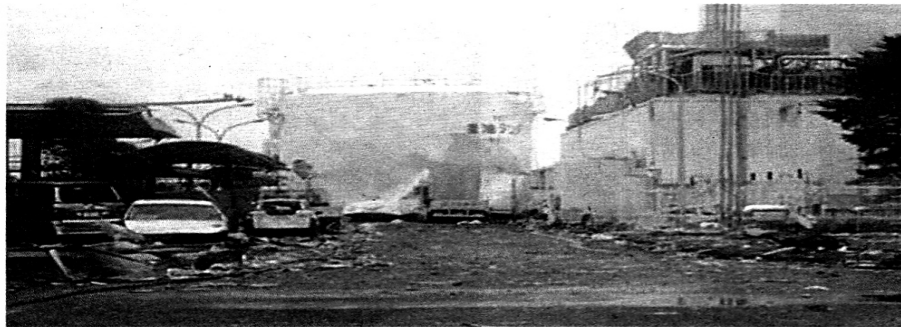
■第1章「3・11」

福島第1原発1、2号機中央制御室の当直長の1人、遠藤英由(51)が発災の正面ゲート前に到着したのは、3月11日午後9時ごろだった。制御室に応援で入ろうと富岡町の自宅から約13キロ歩いてきた遠藤の脇を、1口の車両がすり抜けていった。

「電源車を通ります。ゲートを開くんですよ」

「オリブドラブ」と呼ばれる濃い緑色に塗られた陸上自衛隊の電源車が拡声器でゲート内の警備員に指差していた。ゲートの照明は消えている。そこに自衛隊の電源車……。第1原発で何が起きているのか瞬時に

高線量の建屋 入域禁止



津波で流され構内の道路をふさいだ重油タンク
＝2011年3月、福島第1原発（東京電力提供）

理解した。全ての電源がなくなって
いるのだ、と。

当直E班を預かる遠藤は11日午後
9時からの勤務を前に自宅で仮眠
中、地震にあった。2007年の中

越沖地震の際には柏崎刈羽原発(新
潟県)で勤務していた。経験から周

辺道路が寸断されたり、渋滞が起き
たりして車が役に立たないだろうと
考え、歩いて第1原発まで来たのだ。

妻には「しばらく帰れない」とにか
く風呂とか鍋に水をためておくよう
に」と話して家を出た。町の防災無線

で天津波警報が出たことは知ってい
たが、携帯ラジオの電池が切れてい

て原発の状況は分からなかった。
源も何も。何も見えねえんだよ」と

「どちらへ?」。ゲートの警備員
いう答えが返ってきた。

に呼び止められた。

「今から現場に行く」

早く制御室に行かなければ。遠
藤はゲートをくぐると構内道路を北

へ約400メートル歩き、交差点を右に折
ままだ水を入れられていない。『ああ、

これはもう炉心が駄目になっている
だろうね』と話していました」

午後11時、放射線管理担当者が1
号機タービン建屋の北側道路を

高さ約9・2メートルの重油タンクがふさ
いでいる。手前には港湾観測船が赤
い船底を見せて打ち上がった。

遠藤はタンク脇のわずかな隙間を
既にかんりの高線量となっているは

通って海側に出た後、1、2号機サ
ブド。連絡を受けた所長の吉田昌郎
(56)は午後11時5分、1号機原子炉
建屋の入域禁止を命じた。(敬称略)

長たちが応援に駆けつけていた。状
況を尋ねると「何にもないんだ。電
源(秀樹)